

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2013 年 1 月 6 日

派遣者氏名（専門分野）	山田智輝（ ヴェーダ文献学 ）
-------------	-----------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	リグヴェーダにおける河川に関する文献学的研究 ―特定の河川名が言及される用例を中心に―
-------	---

派遣期間

平成 24 年 10 月 3 日 ～平成 24 年 12 月 6 日

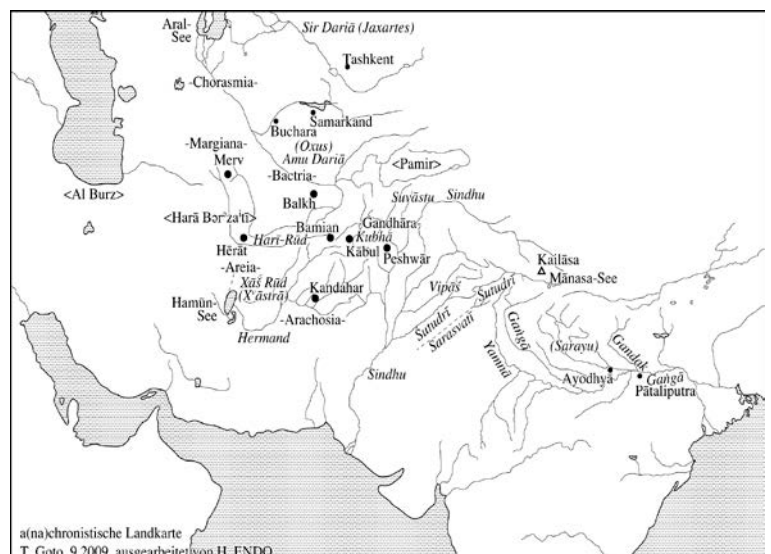
訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	アメリカ合衆国	マサチューセッツ州 ケンブリッジ	ハーバード大学	Michael Witzel 教授

派遣先で実施した研究内容

古インド・アーリヤ語（所謂サンスクリット）の中で最も古い段階の言語である「ヴェーダ語」によって伝承された宗教文献群を「ヴェーダ文献」と呼ぶが、「リグヴェーダ（*ṛgveda*）」は、それら一連のヴェーダ文献の中で最初に編集された文献である。内容的には、特定の神々に対して捧げられた「讃歌」を集成した韻文文献に位置づけられる。

リグヴェーダは紀元前 1200 年頃、現在のパンジャブ地方周辺で編集・固定されたものと推定される。しかしながら文献が伝える世界の中心的な舞台背景となっているのは、往時のインド・アーリヤ人たちがその地域に至る以前に遊牧生活を営んでいた頃の活動域、具体的には現在のアフガニスタン周辺の丘陵やステップ地帯である。遊牧・移住中心の生活をしながらアフガニスタンからヒンドークシュ山脈東端のカーブル峠を通り、インドの地に到達するまでの記憶を相当程度留めているという点がこの文献の大きな特徴の一つである。後続する他のヴェーダ文献が編集された頃には、生業形態は定住生活へとある程度移行が完了しており、移住生活そのものは事実上追憶の中の存在になっていたと考えられるのに対し、リグヴェーダではそのような古い時代の記憶の痕跡を記述の中に辿ることが可能であるという点で、他のヴェーダ文献とは明確に性格を異にする。

報告者は現在日本学術振興会特別研究員（PD）として、文献リグヴェーダに言及される「河川」を主要研究対象とし、遊牧民にとっての生活上の最重要拠点の一つである河川がどのような存在に位置づけられるのか、生活実態や



社会背景、思想や宗教観、神話や世界観といった点に着目し、総合的な解明を目指す研究に取り組ん 裏面に続く
本派遣プログラムでは、河川に関する言及の中でも、特に「特定の河川名が言及される箇所」を中心に研究を行った。具体的にはリグヴェーダにおける主要な河川であるサラスヴァティー（今日のガッガル・ハークラー川。以下同様に括弧内は今日の名称）、またシュトゥドリー（サトレジ川）、クブハー（カーブル川）、ヴィパーシュ（ベアス川）といったシンドゥ（インダス川）の支流、さらにはガンガー（ガンジス川）、ヤムナー（ヤムナ川）、サラユ（サルジュ川）といったインド亜大陸北部の河川が挙げられる。

上記の研究を遂行するために、報告者はハーバード大学 Department of South Asian Studies の Michael Witzel 教授の元に赴いた。Witzel 教授はヴェーダ文献学が専門であり、当分野の全般に亘り広く優れた業績を有している。それらの諸研究の中でも、同文献群の記述から看取される往時の地理や歴史、社会背景に関する研究を多数発表している。これらの研究に際しては、考古学をはじめとする他分野の見解も参照されており、文献による「証言」と他分野から提出される「物証」との照合も意欲的に行われている。また比較神話学の分野においても多くの研究成果を発表しており、インド亜大陸のみならずユーラシア全体の神話を俯瞰する革新的な見解を発表している。

現地では教授のリサーチ・アシスタントとして在籍し、教授の研究室を拠点に、図書館をはじめとする大学の諸施設を利用しながら文献学を中心に、約二ヶ月間の研究活動に従事した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

・自身が作成した原典翻訳を土台とする論文形式の資料（英文）に基づき、教授と一対一で議論するという形式で、数回の指導を受けた。特に翻訳に関しては、細部に至るまで厳密なチェックを受けることができた。こういった作業は謂わば文献学の中核であり、本派遣の最大の成果の一つに位置づけられる。

また教授が有する地球物理学や考古学に関する最近の資料や研究報告について、特にインダス期のサラスヴァティー（ガッガル・ハークラー川）に関するものを中心に、多数教示を受けた。以下にその一例を示す。ガッガル・ハークラー川の河水の供給は、インダス川等の他のパンジャーブの河川とは異なり、ヒマラヤの雪解け水ではなく、夏期のモンスーンによって主に担われていたことが最近の研究から明らかにされつつある。この環境は冬季農業に最適であり、往事の河岸部の住人の生業形態もこのモデルに近いものであったものと推察される。こういった情報からは、文献からは直接的には窺い知ることの難しい、古い時代の環境に関する具体的なイメージを補完する知見が得られた。

しかしながらその一方で、リグヴェーダが伝える「証言」と上述のような広義の「歴史的事実」との隔たりに関しては、慎重な考察が求められることを再確認した。例えばサラユ川は、名称上は今日のサルジュ川（ガンジス川の支流）に該当するが、リグヴェーダの主要舞台から遙か東に位置するこの河川に真に比定されるか否かについては議論の余地があり、さらにリグヴェーダ第Ⅴ巻（第53讃歌、第9詩節）でシンドゥやクブハーといったパンジャーブ地方及びその西方の諸河川と共に言及されることや、古ペルシア語の地名ハライヴァに対応形が見受けられること等に鑑みると、文脈によってはより西の河川を指す可能性も決して排除できない。

・ The South Asia Initiative at Harvard University 主催による、インダス末期のパンジャーブ地方における水系環境の変化と、インダス文明衰退の原因の関係をテーマとする公開セミナーに出席した（発表タイトル “Prehistorical and historical changes in hydrology and settlement in the Indian Subcontinent: What happened and what can we learn?”）。発表者はパキスタンでの地質学的調査に基づき、文明の衰退の引き金となった要因として「インド洋のモンスーンの減退によるインダス川の水量の低下」という可能性を提示していた。報告者がこれまでに参加していた総合地球環境学研究所による研究プロジェクト「環境変化とインダス文明（プロジェクトリーダー 長田俊樹）」では、「インダス末期にモンスーンが活性化した時期がある」という、本発表とは若干相違する見解が示されている。この点については、今後他分野の研究者と意見交換を行い、さらなる知見の獲得を目指したい。

・ Witzel 教授の蔵書及び大学図書館中から、自身の研究に関連する資料の複写を行った。未出版の資料を含む、入手困難な資料が複数得られた。また同教授が所有するマイトラーヤニー・サンヒターの写本資料について、写真撮影にてデータ収集を行うことができた。

派遣後の研究発表の予定

- ・2014 年 1 月 7 日から 10 日にインド，ケーララ州にて開催される 6th International Vedic Workshop にて，本派遣プログラムの成果を含む内容の研究発表を行う（登録受け付け期間は 2013 年 3 月 1 日から 9 月 1 日）。
- ・2013 年度に，派遣中に作成した翻訳資料に基づく英文の論文を国内学会誌に投稿する。現時点では印度学宗教学会「論集」を予定している。